

ヒュームと人種主義⁽¹⁾

西 内 亮 平

はじめに

デイヴィッド・ヒュームは、宗教的迷信に立ち向かった啓蒙時代を代表する思想家であり、またフランスでは“Le bon David”と親しまれ、親友アダム・スミスにもその人柄を大いに賞賛された人物である。しかし一方で、「国民性について」と題されたエッセイに彼が加えた脚註は、人種主義に大きな影響を与えたと言われてきた。ヒューム研究においては、リチャード・ポプキン以来、ヒュームと人種主義との関係について多くの研究がなされ、さまざまな論点が提示されてきた。本稿では、主要な先行研究を整理し、このテーマに関して今日問うべき課題を明らかにしていきたい。

本稿ではまず第一節において、こうした研究の嚆矢となったポプキンの研究を確認する。彼の解釈は、人種主義に関する思想史理解と密接に結びついているため、ヒュームに至る

までの時代範囲に限ってこれを概観し、その上で彼がいかなる点でヒュームを批判するかを確認したい。第二節では、イマワリーによる重要な指摘を中心に、ポプキン以降の展開を見ていく。第三節では、「国民性について」の註に見られる人種主義的見解が、はたしてヒューム哲学の他の側面と整合するものかをとりわけ「反例」と「偏見」に注目する研究を手掛かりに検討する。これによりヒュームの人種主義的見解を、「ヒューム的に」批判しうる可能性を探ってみたい。

一 ポプキンの解釈

——人類の多起源説とヒュームの人種主義

リチャード・ポプキンは、懐疑主義に関する研究で著名な思想史家であり、ヒュームの人種主義への関心も一連の思想史研究の中から生まれてきた(Popkin [1980], xii)。そのため、本稿ではまず人種主義をめぐるポプキンの思想史理解を確認

しておきたい⁽²⁾。あらかじめ要点を述べておくと、次のようになる。コロンブスの新大陸到達以降、その地に住まう原住民の人間性がさかんに論じられ、この問題への回答の一つである「先アダム人説」あるいはより広い含みを持つ「人類の多起源説」は、変更不可能な生物的特徴に基づく「新しい人種主義」を生み出すことになった。この新しい人種主義は、自然学の成果の一部と結びつきながら形を変えつつ今日まで続いていくのだが、ヒュームもその系譜の中に位置付けられ、後世の人種主義に大きな影響を与えたのであり、「国民性について」に付された脚註こそ彼が多起源説を採用していた証拠なのだ、というものである。

さてポプキンによれば、スペインによるインディアスの征服が人種主義の思想史における大きな転換点であったという。なぜなら、彼の言う「新しい人種主義」(Popkin [1973], 79)が明確に姿を現してきたからである。これは古代ギリシャに見られるようなそれ以前の人種主義とは異なり、「被差別集団を何かしらの合法的な手続きによって離脱することが想定されていない」という特徴を持つ(ibid.)。

スペインやポルトガルがインディアスに到達するに至り、その土地と原住民をいかに扱うべきかという新たな課題に直面した。これはさまざまな論点を含むが⁽³⁾、とりわけポプキンは「発見された原住民は本当に人間なのか」という「インディオの人間性の問題」と「彼らは何者なのか」という「インディオの出自の問題」に注目する(Popkin [1973], 80)。

「インディオの人間性」については、インディアス問題を

象徴するバリヤドリッド論争(1505年)でも大きく取り上げられた。この論争の直接のきっかけはスペインによる征服戦争を擁護するセプルベダの『第二のデモクラテス』の出版可否をめぐるものであったが、そのなかでこの問題もまた取り上げられたのである。松森の整理によれば、インディオの人間性に関して、当時には大きく三つの立場が存在した(松森 [2009], 579)。一つ目は、「インディオは理性を欠き、生来上位のものに仕えるべき劣った存在なので、戦争に訴えてでも彼らを支配下におくことができる」という「自然奴隷説」であり、これはセプルベダに代表される。二つ目は、「インディオは理性を有する権利主体ではあるが、それを十分に行使できない未熟な存在なので、暴力を控えながら、万民法上の権利と義務を遂行するために彼らを保護下におくべきだ」という「自然児説」であり、これはビトリアに始まるサラマンカ学派に多く見られる立場である。三つ目は、「インディオはスペイン人と同等に扱われるべき人間なので、戦争に訴えたり強制的に支配下においたりすることはできない」という「理性的人間説」であり、ラス・カサスに代表される立場である。このうち、ポプキンのいう「新しい人種主義」にもっとも親和性があるのはセプルベダの「自然奴隷説」である。セプルベダは『政治学』のラテン語訳を著し当時名を馳せたアリストテレス研究者であり、彼の「自然奴隷説」もアリストテレスの言葉に依拠していた⁽⁴⁾。『第二のデモクラテス』において、セプルベダは自身の代弁者デモクラテスに次のように述べさせている。

人間の中には、自然本性からして主人であるものと奴隷であるものがあります。思慮分別や才能に優れた人々は、たとえ肉体的に頑強でなくとも、生まれながらにして主人であり、それにひきかえ、必要な義務を果たすに足る体力を備えていても、愚鈍で理性に劣る人々は生来の奴隷です。……彼らにとり、優れて人間的で有徳な国民や君主の支配に従うのは有益なことであり、さらに自然法にも合致します。つまり、彼らは自分たちより人間的な人々の徳、思慮分別及び遵法態度を見習うことにより、野蛮な性格を捨て去り、遙かに人間的な生活を送り、節度をわきまえた行動をとり、徳を実践するようになるからです。したがって、もし彼らが人間的で徳高い人々に支配されるのを拒めば、武力によって彼らを強制的に服従させる⁽⁵⁾とが許されます。(セプールベダ [2015], 107-8)

この引用に明らかなように、インディオは生来の奴隷であるがゆえに、優れたスペインが彼らを征服・支配するのは許容されるだけでなくむしろ望ましいことですからあるという論理を、セプールベダは展開したのであった。

「インディオの出自」については、大抵の説が聖書の枠組みの中で解決を図ろうと努めるものであり、インディオもアダムの子孫であることを認める「単一起源説」に類するものであったが⁽⁵⁾、のちには「インディオはアダムとイヴの子孫ではなく、それに先立つ独立した由来を持つ」という、よ

り聖書に反する恐れの大い「先アダム人説」が生まれた。「先アダム人説」のように複数の人類の起源を認める「多起源説 (polygenetic theory)」は、聖書解釈上の火種を抱えており、宗教的により大きな危険をはらむものであった。ポプキンはこの説こそが、彼の言う「新しい人種主義」を生み出す元凶になったと考えている (Popkin [1973], 81)。

単一起源説と多起源説はどちらも自然科学の影響を受け、宗教とのつながりは保ちつつも、それぞれにおいてより自然化ないしは世俗化されたタイプの説明を生み出した。(ポプキンの言葉ではないが)「自然化された単一起源説」と呼ぶるものの集大成が、ビュフォンの「退行説 (degeneracy theory)」である (Popkin [1973], 87; [1977-8], 252; Cf. ポリアコフ [2014], 219-224)。ビュフォンは、白人そ人間の原初の肌色であり、そこから気候⁽⁶⁾や食べ物、生活習慣や病気などさまざまな要因によって変化していったと考えた。そして重要なことに、この変化は不可逆なものではないとされた。それゆえ、パリからコーカサス山脈の間に移住させ、フランス料理を食べさせ、ヨーロッパ式の教育と生活様式を与えれば、誰もが数世代で白い肌と文明を持つようになると、ビュフォンは認めている。「白人がもつとも美しく、知性が高く、文明化されている」などといった彼の言葉には確かに「人種主義者の視点」が見うけられるものの、被差別集団から離脱する余地を残すという点で、古代からの「古い人種主義」の系譜に属すと言えるだろう (Popkin [1973], 87)。ビュフォンの退行説は、当時における最高の経験的研究とみなされ、

十九世紀にもいっそう洗練されながら受け継がれていった (Popkin [1973], 87-8)。

一方で、多起源説も脈々と受け継がれてきた。この説の系譜をバラケルスやジオルダーノ・ブルーノにまで辿りうる可能性にも触れつつ、それ以上にポプキンが重視するのは、ラ・ペレール (Isaac La Peyrère, 1596-1676) の『先アダム人』 (*Præ-Adamitæ*, 1655) やあや (Popkin [1973], 90-1; Cf. ポリアコフ [2014], 176-7)。先アダム人説をはじめとした多起源説は、「十分異端と呼ばれる可能性があるものであったので」支持者の数は少なかった」が、「地理学、生物学、考古学、人類学、歴史学において聖書に反するような新しい発見を最もよく説明するもの」として「聖書をもはや真面目に受け入れない人々」の間で受け入れられた (Popkin [1973], 92)。これにより (ラ・ペレールの思想自体は人種主義的傾向が薄いにもかかわらず) 「十九世紀アメリカにおける『科学的』で強力な人種主義擁護論へと発展する」可能性が芽生えてしまったとポプキンは考える (ibid.)。実際に、ラ・ペレールの説は、ヴァージニアの植民者たちによってすぐさま形を変えられ、自分たちの黒人奴隷への過酷な扱いを正当化するのに利用されたという (Popkin [1992], 66)。

ではポプキンは、ヒュームのどのような言説にこうした多起源説と、それに由来する「新しい人種主義」を見出すのか。それは一七四八年に出版された「国民性について」というエッセイに一七五三年になって加えられた脚註である。これはヒュームと人種主義の関係を論じる際に必ず触れられる箇所

であるので、少々長いがすべて引用したい(7)。

私は黒人および他のあらゆる人種 (というのは四つか五つの種類が存するので) が生まれつき白人に劣ると考えがちである。白以外の肌色をもつ文明化された国民は一つもなかったし、行動と思索のいづれかにおいて著名な個人さえ一人もいなかったのである。(I am apt to suspect the negroes, and in general all the other species of men (for there are four or five different kinds) to be naturally inferior to the whites. There never was a civilized nation of any other complexion than white, nor even any individual eminent either in action or speculation.) 彼らは精巧な工芸品、芸術、学問をいっさい持っていない。他方、古代のゲルマン人や現代のタタール人のような白人の中でもっとも不作法で野蛮な人々でも、勇敢さ、統治形態、あるいは何か他の点で優れたところを持っている。もし自然がこうした人種の間に根源的なちがいをつくらなかったとしたら (if nature had not made an original distinction between these breeds of men)、かように多くの国や時代で見受けられる一様で恒常的なちがいは起こらなかつたであろう。黒人奴隷は、我が国の植民地は言うまでもなく、ヨーロッパ全土に広がっているが、才能の兆しを見せた者はこれまで一人たりとも存在しない。しかし、卑しい生まれで教育も受けていない人々であろうとも、われわれ〔白人〕であれば、急に頭角を現し、それぞれの職業において優

秀さを見せることはあるだろう。なるほどジャマイカではとある黒人を才能と学識を持ち合わせた人物と噂している。だが、この人物は、わずかな言葉をはつきり話すオウムのように、わずかな成果で称賛されているという可能性が高いであろう。(E 629, n. 1)

明言はされていないものの、「四つか五つの種類が存する」や「自然が人種の間根源的な違いを作らなかったとしたら」などの文言は多起源説や「新しい人種主義」をほのめかすものとして捉えることができるだろう。そのうえでポプキンは、ヒュームの宗教への批判的な姿勢を踏まえ、「ヒュームの見解は非宗教的なタイプの多起源説であり、他の人々よりも知的能力や文化的能力に優れた人種がいるという問題を、神ではなく生まれの問題として扱っていた」としている (Popkin [1992], 65)。それゆえポプキンは、ヒュームの多起源説を (先アダム人説などとは違って) 宗教的要素が排された「自然化された定式化」と表現している (Popkin [1992], 66)。
しかしながら、ヒュームが人種についてまとめた言及をするのは「結局この脚註だけ」である (Popkin [1977-8], 259)。なぜポプキンは、たった一箇所の発言をことさらに取り上げるのだろうか。それは、このヒュームの脚註が歴史的に大きな影響力を誇ったと考えるからである (ibid.)。例えば、これがカントに影響を与えたことはよく知られているし (Popkin [1977-8], 259-60)、また当時影響力を持ったエドワード・ロングの『ジャマイカ史』(1774)においても、黒人を劣つ

た人種であると示す根拠としてヒュームの名が次のように挙げられている。

ヒューム氏はアフリカ先住民に関する自らの観察から大胆にも、彼らが他の人種に比べ劣っており、人間精神による高度な技芸を彼ら自身が生み出すことは一切できないと結論付けている。(8)

こうしてヒュームは、アフリカ人をヨーロッパの文化に参入できない劣つた人種だとする考えの「スポークスマン」になってしまったのであり (Popkin [1992], 66)、またそれゆえ、反人種主義の立場に立つものによっても盛んに引用されることになった (Popkin [1977-8], 264)。ポプキンは、このようにヒュームの歴史的影響を強調するのである(9)。

二 ポプキン以降の展開

本節ではヒュームの人種主義に関するポプキン以降の展開に大きな影響を与えた、イマワの論文を取り上げたい。彼の主張は、ポプキンへの批判を含め、およそ次の三点に要約される。第一に、「国民性について」の脚註は一七七七年版で修正が施されているが、その事実をポプキンは見逃している。第二に、その修正はジェイムズ・ビーティ (James Beattie, 1735-1803) からの批判に応答するためになされたものである。第三に、修正された脚註でも黒人への人種主義的差別は残っているので、ヒュームの人種主義は熟慮の末の見解で

ある。以上のようになるだろう。

第一の論点に関して言えば、イマワの指摘は全く正しい。ポプキンが参照したのは、当時において標準とされたグリーン&グロウス版の『デイヴィッド・ヒューム哲学著作集』(*The Philosophical Works of David Hume*, Thomas H. Green & Thomas H. Grouse eds., 4 vols., 1882-86)であったが、この版では一七七七年の修正が反映されていなかったのである。ヒュームのエッセイに関してはその後、ミラー版 (*Essays: Moral, Political and Literary*, Eugene F. Miller ed., *Liberty Classics*, 1985) が標準となり、グリーン&グロウス版の不備が発見された。ミラーは、一七五三年版の註に次のようなコメントを付している。

以下の異文は「一七五三年」K版において註に初めて登場したが、グリーン&グロウス版ではヒュームの最終「一七七七年」版の註として誤って含まれてしまっている。一七七七年版にはこれとは異なる改定された註がつけられており、本版のテキストにはこちらを脚註十として組み込んでいる。(E 629, n. i)

では一七七七年版の修正された記述(註の冒頭部分にあたる)を実際に見てみよう(10)。

私は黒人が生まれつき白人に劣ると考えがちである。あの肌色をもつ文明化された国民はこれまでほとんどい

かったし、行動と思索のいずれかにおいて著名な個人さえ一人もいなかったのである。(I am apt to suspect the negroes to be naturally inferior to the whites. There scarcely ever was a civilized nation of that complexion, nor even any individual eminent either in action or speculation.) (E 208, n. 10)

一七七七年版の修正はヒュームが手がけた最後のものであり、ヒュームは書簡の中で「あと二十年生きられたとしても、これ以上良くすることはできない」(L II, 322)と述べている。修正の要点をイマワは、(1) 多起源説的な言い回しをやめ、(2) 主張の範囲を狭め、(3) 攻撃目標を変えた、という三つにまとめている (Immerwahr [1992], 483)。(1) 及び(3)に当たるのは、「黒人および他のあらゆる人種(というのは四つか五つの種類が存するので)・白以外の肌色」という表現を削り、「黒人」・「あの肌色」に改めたところである。これにより、言及する対象を、非白人の中でもとくに黒人だけに絞ったというのである。また(2)に当たるのは、「文明化された国民は一つもなかった」という箇所に含まれる“never”を“scarcely ever”へと改めたところである。

ヒュームはなぜこのような修正を行ったのか。イマワによれば「その理由を直接示す証拠をわれわれは持っていない」(ibid.)。したがって、状況的な証拠からこれを推測するのが彼の第二の論点となる。イマワは、①ヒュームの書簡での発言と、②ビーティの『真理の本性と不変性について』(1770)

との対応という二つの手掛かりから、ヒュームの修正はピーティからの批判への対応であったと推測する (Immerwahr [1992], 483-5)。

だが、この推測にはギャレット (Garrett [2000]) が指摘するように、イマワーに瑕疵があるように思われる。まずイマワーが二つの根拠としたヒュームの書簡であるが、これはピーティとトマス・リードに直接言及するものとしてヒューム研究においてよく知られたものである。イマワーは該当箇所の頁数を示すだけだが (Immerwahr [1992], 484)、ギャレットに習い解釈上必要な部分を引用しておこう。

短い注意書き (Advertisement) を一つ、著作集最新版の第二巻巻頭に付け加えて欲しいと思っています。……どうかお願いしたいのは、この注意書きを著作集と同数刷って、今後は必ずそれを第二巻に付して配布していただくということです。それはリード博士と、あの頑迷で大馬鹿のピーティというヤツへの完全な回答なのです。 (L II, 301)

ギャレットが指摘するのは次の二点である。第一に、ピーティと並べられているトマス・リードは人種主義に関してヒュームを批判しているわけではないということ、そして第二に、引用から明らかなようにここでのピーティへの言及が「国民性について」の註をめぐるものと示す根拠はないことである (Garrett [2000], 173-4)。しかし言わねば「注意書き」

は、「国民性について」を含む著作集第二巻ではなく、「人間知性研究」などを含む第二巻に付けられたものであり、またその内容を鑑みても人種主義をめぐるものとは考えられず、「人間本性論」をめぐるピーティとリードの批判に対する応答である可能性はるかに高い (Garrett [2000], 174) というギャレットの主張は当然のものであろう。

イマワーのもう一つの論拠は、ヒュームの修正がピーティの批判内容に対応しているというものだった。ピーティはヒュームの表現をあえて用いながら、以下のように述べている。

行動と思索において優れた人間がいなければ、ペルーとメキシコの諸帝国は統治されえなかっただろうし、後者の首都が湖のただなかにあのような非凡な様式で建築されることもなかっただろう。古代のペルー人の偉大さ、優れた統治、創意についてはだれしも耳にしたことがある。アフリカ人とアメリカ人は数多くの独創的な工芸品と芸術を持ち合わせていると知られている。これらはヨーロッパ人であつても容易にまねできないものである。確かに学問はないが、それは彼らが文字を持っていないからだ。……ヨーロッパ全土に見られる黒人奴隷は、彼らの悲惨な状況にもかかわらず、才能の兆しをしばしば示す。彼らは優れた工芸家や楽器演奏者になり、果ては主人が教えようと骨折することは何でも習得してしまうし、残虐・背信・放蕩などは思いもよらない。 (Beattie [2000], 229-30)

先述したようにヒュームが脚註において、(2)「めったにない」と主張の範囲を狭め、(3)「黒人」だけに攻撃目標を変えたのは、こうしたビーティからの批判に応じたものであるとイマワーは解釈する (Immerwahr [1992], 484-5)。

ギャレットは、この二つ目の論拠にも批判を加える。新大陸の文明への言及はビーティに限らず、当時の文献にいくらかも見出せるごくありふれたものであるし (Garrett [2000], 176)、ヒュームが直接の影響を受けた候補としてはスミス、ロバートソン、ヴォルテール、モンボドなど可能性の高いものが多くあり、ビーティに対するヒュームの低い評価を鑑みれば、むしろ「一番ありそうにない原因こそがビーティである」という (Garrett [2000], 175)。

最後にイマワーの挙げた第三の論点を検討しよう。一七七七年版の修正でも、黒人に対する人種主義的見解が残されたことから、イマワーは「ヒュームの人種主義が意図的で熟慮されたものであったことも示している」と主張し (Immerwahr [1992], 485)「ヒュームの見解を『哲学的人種主義』と呼ぶ (Immerwahr [1992], 481)。この主張において特に重要と思われる点は、ヒュームの人種主義を、ポプキンとは異なり、多起源説と切り離して論じたことである。ポプキンの言うように多起源説が歴史的に「新しい人種主義」と結びついてきたことが事実だとしても、両者が論理的に不可分というわけではない⁽¹¹⁾。したがって、ヒュームの人種主義的見解の源泉を、多起源説ではなく、彼の哲学体系に内在的に見出せるか否かがより重要な問題となってくる。

三 人種主義とヒューム哲学の関係

ヒュームに見られる人種主義と他の哲学的見解との関係についてさまざまな角度から研究がなされてきた⁽¹²⁾。ここでは、次の二つの問題を中心に検討したい。第一に、ヒュームは適切な帰納推論を行っているのかに関わる「反例」の問題、そして第二に、ヒュームは適切に作品を批評できているのかに関わる「偏見」の問題である。

まず第一の「反例」の問題を検討しよう。そもそも「国民性について」というエッセイにおけるヒュームの目的は、ある国や地域の人々に広く見られる特徴が、気候のような「自然的原因 (physical causes)」ではなく、「社会的原因 (moral causes)」によると示すことであつた⁽¹³⁾。社会的要因とは「特定の生活様式をわれわれに習慣づける……ありとあらゆる事情」を意味し、具体的には「政体の性質、公共問題の改革、人々の生活の豊かさや貧しさ、隣国との関係など」が挙げられる (E 198)。例えば、国土が広大であり多様な気候が見られる中国において、人々に斉一的な性格が見られることを、ヒュームはこの地では何世紀にもわたって全土を支配する統一的な政権が存在したことで説明しようとする (E 204)。

しかし、ヒュームが件の脚註において「もし自然がこうした人種の間に根源的なちがいをつくりなかつたとしたら、かように多くの国や時代で見受けられる一様で恒常的なちがいは起こらなかつたであらう」(E 208, n.10)と述べるとき、人種間に見られる文化的な違いを社会的原因ではなく、あえ

て・先・天・的・な・要・因・に・帰・し・て・い・る・こ・と・に・な・る。ギャレットとセバステイアンによれば、この註でヒュームはある種の「移植実験」を行っているという (Garrett & Sebastian [2017], 36)。つまり、同様の自然環境と社会環境に白人と黒人を置いたときに、白人であれば「卑しい生まれで教育も受けていない人々であつても……急に頭角を現し、それぞれの職業において優秀さを見せることはある」一方で、黒人奴隷の中に「才能の兆しを見せた者はこれまで一人たりとも存在しない」(B39, n.2) ことから、両者の差異は自然的原因でも社会的原因でもなく、人種によるとヒュームは推論するのである。

しかし、ヒュームがこのような推論を行う際に、彼が当時参照しえたはずの「反例」を無視しているとしたら批判されてきた。その「反例」の代表が、ヒューム自身が註で言及するジャマイカの「とある黒人」であり、これはおそらく彼の同時代人のフランシス・ウィリアムズ (Francis Williams, c.1700-1770) を指すと言われている。ウィリアムズは黒人として初めてケンブリッジに入学し、ラテン語で詩を作ったと言われている (Popkin [1992], 71)。ポプキンは「詩を書いたジャマイカーへのヒュームの言及は、彼がフランシス・ウィリアムズについていくらか知っていたことを示しており」 (Popkin [1992], 72)。「ヒュームはこの反例を知っていたはずなのに、自らの偏見のせいでそれを無視した」と考えている (Popkin [1977-8], 266)。それゆえにポプキンはヒュームを「お粗末な経験主義者 (a poor empirical researcher)」と呼び批判している (Popkin [1992], 73) (7)。

しかし、果たしてヒュームは本当に「反例を無視した」のだろうか。ウィリアムズのことを「わずかな言葉をはっきり話すオウムのように、わずかな成果で称賛されている可能性が高い」(E 308, n.10) と評しているのを鑑みるに、ヒュームは、ウィリアムズという「反例の存在を無視した」というよりも、ウィリアムズの作品の芸術的価値は低いと判断することと彼の存在を「反例と認めていない」のではないかと本稿は考える。ゆえにこの問題は、第二の問題すなわちヒュームにおける批評の適切さの問題へと接続することになるだろう。

ではその批評の問題を検討しよう。文芸・芸術作品の「批評 (Criticism)」に関するヒュームの見解は、いくつかの著作に散見されるが、中でも特に重要とされているのが「趣味の標準について」というエッセイである。ヒュームはわれわれの趣味が多様である事実を受け止めた上で、それでも「趣味の基準 (standard of taste)」すなわち「賞賛ないし非難の一般原理」があり、「その影響力は注意深い目の持ち主なら心の働きのすべてのうちに辿ることができると考える」(E 233)。そして批評家が、そのような基準を持ち、「より洗練された技芸における真の判定者」(E 241) となるためには、(1)「繊細さ (delicacy)」、(2)「実践 (practice)」、(3)「比較 (comparisons)」、(4)「偏見からの自由 (prejudice)」、(5)「良識 (good sense)」という五つの条件を満たさねばならないという (E 234-241)。

ヒュームの人種主義に関する先行研究では、このうち「偏見」の問題が注目がされるものが多く (Cf. Popkin [1977-8];

Palter [1995]; Costelloe [2009, Ch.6 etc.]。ヒュームは、われわれ人間が偏見を抱き「自分のいる時代や国の様式に浸りきつて」(E 239)、「自分自身の趣味と理解力からかけ離れたものならなんでも野蠻と呼びがち」(E 227)である傾向をたびたび指摘している。だからこそ、「あらゆる偏見から心を守り、検討されている当の物以外には、何も考慮に入れたはならない」(E 239)。より具体的に言えば、作品を検討するにあたり、「作者に友情や敵意を抱いていたとしても、その状況から抜け出さなくてはならない」のであり、「できることなら、自分個人の存在と、自分の置かれた固有の状況を忘れさらねばならない」(ibid.)。

果たしてヒュームはこれを実践できているのだろうか。ヒュームは「ある特定の人物が……偏見から自由であるかどうかは、しばしば論争の主題であり、大いに論じ調べるべきだ」(E 235)と述べているが、この言葉が黒人の文化に言及する際のヒューム自身へと跳ね返る。ポプキンによれば、「ヒュームは、いかに偏見があらゆる証拠を覆しうるかに関する彼自身の説明の完璧な実例となっているようだ」(Popkin [1978], 259)。つまり、ヒュームは偏見から抜け出せておらず、自身の条件に照らして、黒人の文化に関して適切な批評家とは言えないのである。しかし、コストエロのようにこれを逆手にとって「ヒューム個人の誤ち」と「ヒューム哲学」を切り離し、後者を擁護しようとするものもある (Costelloe [2009], 105)。

また本稿では、批評家に必要とされる「実践」と「比較」

にも注目してみたい。ここで「実践」とは「特定種類の美的なものを頻繁に調べじっくり鑑賞すること」であり (E 237)、また「比較」は「さまざまな時代と国において賞賛された優れた作品をいくつも見て、吟味し、比較衡量すること」であり (E 238)、「さまざま種類の美を比較する機会を持たなかった人は、見せられたものに関して意見を述べる資格を全く持たない」とされる (ibid.)。

果たしてヒュームは、自身のこの条件を満たすであろうか。言い換えれば、ヒュームは黒人の作り出した技芸や学問の作品を十分なだけ鑑賞した経験を持つのだろうか。マクナブがヒュームの『宗教の自然史』を「二次資料頼みの安楽椅子人類学」と評するように (MacNabb [1967], 88)、アフリカやアメリカへの渡航歴のないヒュームにこうした経験が十分あったと言える要素はあまりないだろう。無論、こうした事情はヒュームに限らずほとんどの同時代人がそうであったかもしれない。理想的な批評家の資格がある人は「きわめて希少である」とヒュームは述べているが (E 241)、「実践」と「比較」という条件に限ってもかなり満たすのが難しいものであり、上記五条件をすべて満たすとなればなおのことである。以上より、さしあたり次の二つが言えるだろう。第一に、ヒュームは、黒人文化について不十分な経験しか持たないがゆえに「趣味と美の真の基準」(ibid.)を持つ批評家ではない可能性が高い。彼がより適切な評価を下すためには、少なくともより多くの「実践」と「比較」の経験を持たねばならないだろう。ただし第二に、「国民性について」の脚註

で言及されたウィリアムズに限って言えば、彼はラテン語で詩作をしたのであるから、ヒュームによっても適切に批評される余地はあるだろう。

おわりに

本稿では、ヒュームの人種主義に関するポプキン以来の先行研究を整理し、問うべき論点を明確にすることを試みた。同時代人との思想的影響関係や、ヒュームの哲学体系と人種主義との整合性の問題など、いくらかの道筋は示されたように思われる。しかし、触れることのできなかった点や、議論を十分に深めることができなかった点もあり、なおも課題は多く残されている。とりわけ第三節で触れた、ヒュームの人種主義を、彼の趣味論に照らして批判的に検討する作業については、別の機会を設けてより詳細に取り組んでみたい。

【註】

- (1) 本稿は、二〇一九年八月二七・二八日に行われたヒューム研究学会第三〇回例会の発表原稿「人間本性の自然史…ヒュームにおける人間の多様性と一様性」の一部を拡張し大幅に書き直したものである。ご質問・ご意見を頂いた参加者の方々には改めて感謝申し上げます。また重要な文献をご紹介頂いた壽里竜教授（慶應義塾大学）、森直人准教授（高知大学）に重ねて御礼申し上げます。
- (2) ポプキンの人種主義についての思想史理解は、ゲイツ（Henry Louis Gates）の影響が公言されているが（Cf. Popkin [1992], 66）¹ ポリアコフにも大きく依拠しているように思

われる（直接言及している箇所は Popkin [1973], 99 n.26; [1992], 67 n.12 など）。なおこちらも未完ではあるが高田 [1966] が Popkin [1973] の、高田 [2002] が Popkin [1977-8] の内容を本稿で言及しない箇所も含めて要約を試みている。また人種主義の思想史に関するより新しい見取り図としては中村 [2020] がある。

- (3) 例えば松森はこれを次の三つの争点に整理している。
 (1) 「インディオは理性的存在か」というインディオの人間性の問題、
 (2) 「スペイン人はいかなる理由で彼らを統治しうるか」という彼らに対する支配の正当性の問題、
 (3) 「いかなる場合に征服戦争を行うことができるか」という交戦の合法性の問題、である（松森 [2009], 19-20）。

- (4) 「人間でありながら、自然によって自分自身のものではなく、他のもののものである者、これが自然による奴隷に他ならない。……支配と被支配は、「人間にとつて」たんに欠くことができないばかりか、また有益なことでもある。また、あるものの一方は支配されるために、他方は支配するために、生まれ落ちたそのときに区別されている。」（アリストテレス [2001], 15-6）

- (5) 例えばポプキンは、インディオの出自をイスラエルの失われた支族、ボエニ族、アラビア人、リーフ・エリクソン（Leif Ericsson, 970-1020）の遠征隊などに求める説を挙げている（Popkin [1973], 81）。

- (6) ポプキンは、人間の多様性を気候風土によって説明する思想家の代表例としてモンテスキューの『法の精神』を取り上げている（Popkin [1973], 86）。この解釈は現在でもしばしば提示されるが（Cf. Palter [1995]）、近年批判

が寄せられるようになった (Cf. 坂本 [1995], 131-188; Sebastiani [2013], Ch.1)。例えば、坂本によると「モンテスキュー自身が、物理的諸原因の規定性を過大に評価する傾向をもつデュボスなど先行思想家たちを批判し、政体を中心とする道徳的原因と気候・風土などの物理的原因とを、相互に正しいバランスにおいて評価しなおそうとしていた」(坂本 [1995], p. 162)。

(7) 引用中の「」内は、本稿による補いである。以下も同様。

(8) Edward Long [1774], *The History of Jamaica*, 2, 376. 引用は Popkin [1977-8], 263 より。

(9) ただし、ポプキンのようにヒュームの影響を大と見る研究者が挙げる文献は、賛否両派を含めても十一しかないことから、ポルターは「人種や奴隷という主題の著作が当時溢れていたことを鑑みれば、……厳密に言うとき大きな影響力を誇ったというほどはなから」とする (Palter [1995], 9)。

(10) 一七七〇年版における“between”から“between”への変更にいった表記上の細かなものはここでは措く。これに関しては例えば Garrett [2000], 172 などを参照のこと。

(11) この中立性の問題は、ヒュームが奴隷制度に反対していることを理由に彼を擁護しようとする主張にも当てはまる (Cf. Palter [1995], 7-9; Costelloe [2009], 103-4)。ヒュームは家内奴隷制 (domestic slavery) に反対する理由として、(1) 家内奴隷制は極限の圧政である (E 387)、(2) 奴隷主人は人間性が欠如してしまう (ibid.)、(3) 人類の幸福にとって有害である (E 386) などあげるが、いずれもある種の人種主義に対しては中立でありうる。

「人種主義」という大きすぎる捉え方にとどまらず、この概念をより詳細に分析する必要があるだろう。例えば、アッピアは人種主義の命題を次の三つに区別する (Appiah [1990], 46)。

(1) 「レイシャリズム (racialism)」: 人間には保持され受け継がれる特徴の中でも、とくにある人々にだけ共有されるものを指標として人間をいくつかの人種に区別することができる。

(2) 「外因的レイシズム (extrinsic racism)」: 差別や非難の直接の理由は人種ではなく、人種はそうした理由の目印としてのみ利用される。

(3) 「内因的レイシズム (intrinsic racism)」: その人種である、あるいは自分とは違う人種であることそれ自体が差別や非難に値する。

アッピアによれば、「レイシャリズム」は「外因的」あるいは「内因的レイシズム」へとつながる可能性はあるものの、「レイシャリズム自体は必ずしも危険な考えではない」という (Appiah [1990], 6)。「レイシャリズムが正しいとは思わないが、それ自体は道徳というより事実認識の問題だろう」(ibid.)。本稿の議論に引きつけて考えれば、人類の単一起源説や多起源説は事実問題であり、人種主義へとつながる可能性や、実際にそれを生み出した歴史的事実はあるものの、それ自体としては道徳問題ではない、と言えるだろう。

(12) 例えば、「ヒュームの心理学や認識論」に関する見解との関係に注目し、ヒュームが、「黒人には技芸や学問を生み出すことができない」と考える理由を、「高度な心的『思索』能力を持っていない」ことに見出そうとするエズの研究が

よく知られている (Eze [2000], 697)。

(13) それゆえ、かつてはこのエッセイはモンテスキューへの反論として書かれたとされていた。本稿註6も参照のこと。

(14) ポプキンはヒュームが参照しえた事例としてウィリアムズ以外にもアモー (Anton Wilhelm Amo, 1703-c.1759) ‘カプタン’ (Jacques-Elisa-Jean Capitein, 1717-1747) ‘ホーネトリ’ (Phyllis Wheatley, 1753-1784) を挙げている (Popkin [1992], 70-2)。例えば、哲学者アモーは‘ヴァッテンベルク大学’で哲学の博士号を黒人として初めて取得し、ハレ大学やイエナ大学で教鞭をとったといわれている (Appiah [2018], 109)。仮にウィリアムズの作品には高い美的価値が備わっていないと評価しても、こうした人々すべてを反例として認めないことは確かに相当難しいように思われる。

文献

- Appiah, Kwame A. [1990], “Racisms,” in D. T. Goldberg ed., *Anatomy of Racism*, University of Minnesota Press, pp. 3-17.
- Appiah, Kwame A. [2018], *The Lies That Bind: Rethinking Identity*, Profile Books Ltd.
- アリストテレス [2001] 『政治学』 牛田徳子訳、京都大学学術出版。
- Beattie, James [2000], *An Essay on the Nature and Immutability of Truth, in opposition to Sophistry and Scepticism*, in J. Fieser ed., *Scottish Common Sense Philosophy: Sources and Origins*, vol. 2, Thoemmes Press.
- Costelloe, Timothy M. [2009], *Aesthetics and Morals in the Philosophy of David Hume*, Routledge.
- Eze, Emmanuel C. [2000], “Hume, Race, and Human Nature,” *Journal of the History of Ideas*, pp. 691-698.
- Garrett, Aaron [2000], “Hume’s Revised Racism Revisited,” *Hume Studies*, 26 (1), pp. 171-178.
- Garrett, Aaron & Sebastiani, Silvia [2017], “David Hume on Racism,” in Naomi Zack ed., *The Oxford Handbook of Philosophy and Race*, Oxford University Press, pp. 31-43.
- Greig, J. Y. T. ed. [1932], *The Letters of David Hume*, vol. 2, Oxford University Press. (引用はLIIで略記し、頁数を記す)
- Hume, David [1987], *Essays: Moral, Political and Literary*, Eugene F. Miller ed., Liberty Classics, Second edition. [ユーム [2011] 『道徳・政治・文学論集』 田中敏弘訳、名古屋大学出版会] (引用はEで略記し、マラー版の頁数を記す)
- Immewahr, John [1992], “Hume’s Revised Racism,” *Journal of the History of Ideas*, 53 (3), pp. 481-486.
- MacNabb, D. G. C. [1967], “David Hume,” in Paul Edwards ed., *The Encyclopedia of Philosophy*, vol. 4, pp. 74-90.
- 松森奈津子 [2009] 『野蠻から秩序へ：インディアン問題とサラマンカ学派』 名古屋大学出版会。
- 中村隆之 [2020] 『野蠻の言説』 春陽堂。
- Palter, Robert [1995], “Hume and Prejudice,” *Hume Studies*, 21 (1), pp. 3-24.
- Popkin, Richard H. [1973], “The Philosophical Base of Modern Racism,” in H. E. Pagliaro ed., *Racism in the Eighteenth Century*, Case Western Reserve University Press, pp. 245-262. (以下、Popkin [1980], pp. 79-101 を参照)
- Popkin, Richard H. [1977-8], “Hume’s Racism,” *Philosophical For-*

rum, 9 (2-3), pp. 211-226. (引用は Popkin [1980], pp. 251-266 参照)

Popkin, Richard H. [1980], *The High Road to Pyrrhonism*, R. A. Watson, and J. E. Force eds., Austin Hill Press.

Popkin, Richard H. [1992], "Hume's Racism Reconsidered," in *The Third Force in Seventeenth-Century Thought*, E. J. Brill, pp. 64-75.
 ポリアコフ・レオン [2014]『アリアア神話：ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉』、アリアア主義研究会訳、法政大学出版局。

坂本達哉 [1995]『『ビュームの文明社会：勤労・知識・自由』、創文社。

Sebastiani, Silvia [2013], *The Scottish Enlightenment: Race, Gender and the Limits of Progress*, Palgrave-Macmillan.

セプールベタ [2015]『第二のデモクラテス：戦争の正当原因についての対話』柴田秀藤訳、岩波書店。

高田紘二 [1996]「近代人種主義と17・18世紀思想」『奈良県立商科大学「研究季報」第6巻、第4号、23-35頁。

高田紘二 [2002]「ビュームと人種主義思想」『奈良県立商科大学「研究季報」第12巻、第3・4号、89-94頁。